

# 教授就任にあたって



## う蝕学分野教授就任にあたって

口腔健康科学講座う蝕学分野 興地 隆史

平成15年10月1日発令により、大学院医歯学総合研究科口腔健康科学講座う蝕学分野を担当させて頂くこととなりました。細田裕康教授、岩久正明教授が築いてこられた伝統ある教室を引き継ぐことは誠に光栄であります。その重責には身の引き締まる思いが致しております。私は平成13年7月に歯学部附属病院総合診療部担当として本学に赴任致しました。前任地の東京医科歯科大学では歯科保存学を専攻し、歯内療法を中心に臨床・研究・教育に従事しておりましたので、専門分野への復帰という形となります。

総合診療部ではこれまで多くの方々のご指導とご支援のもと、主として臨床歯学教育に関わる業務に携わって参りました。すなわち、卒前臨床実習、卒後臨床研修の実施責任者としての任にあたるとともに、一年次研修医の総合診療の現場での指導に従事し、さらには態度教育（医療面接法など）や客観的臨床能力試験の導入にも微力を尽くして参りました。これらを通じて、臨床歯学全般に視野を広げつつ、また「歯学教育改革」との言葉に集約される社会の要請にも応えつつ、さらには学習者の視点を十分勘案しつつ、多くの方々のご協力のもとで縦に連なる講座・診療科間の横の連携を図りながら臨床教育や診療活動に関する方向性を見いだす、いわばバランス感覚や執行力を培う経験ができましたことは、今後の大きな糧となるように思われます。

今後は保存修復学、う蝕学、あるいは歯内療法学に関する教育を担当することとなりますが、昨

今歯学生の臨床能力向上の必要性が叫ばれる中で、これらの分野の基本的な臨床学科としての根幹的地位は揺るがないように思われます。「問題志向型」、「student-centered」、「ITメディアの活用」など、教育にかかわる今日的キーワードを即座に実践することは必ずしも容易ではありませんが、考える歯科医師の育成と技術レベルの向上を目指して、講義・実習の改善への取り組みを教室員とともに開始したところです。

一方、研究面での当面の目標は、Cariology（う蝕学）とPulp Biology（歯髓生物学）の連携・融合であります。私はこれまで、歯髓疾患・根尖性歯周疾患の病態機序、特に免疫学的機構の解析を主たるテーマとして進めて参りましたが、これは歯髓生物学の領域に含まれるものです。一方、当教室には幸い、岩久教授により築き上げられたう蝕学に関する包括的な学問体系が大きな資産として受け継がれております。ここに今までの私の経験を加えつつ、象牙質／歯髓複合体の病態や修復・再生機構の解明、歯内療法における先端技術の開発と評価、う蝕と歯内疾患の細菌学的検索、接着性修復材料・技法の開発と評価、レーザーのう蝕治療への応用など、幅広いテーマに取り組みたいと考えております。

さらに臨床面では、総合診療部在任中より手術用実体顕微鏡の応用（マイクロ・エンドドンティックス）、ニッケルチタン合金製超弾性ファイルによる根管の自動拡大など、歯内療法領域の先端的技術の導入に努めてまいりました。お陰様で、難

症例・特殊症例を中心に患者様のご紹介を頂く機会も増加しつつあります。歯内療法は多くの歯科医師にとって極めて日常的なものである反面、高度の技術をもってしても対応に苦慮する症例の割合が近年増加しつつあります。すなわち、処置が比較的容易な初発症例の減少とは裏腹に、困難な再治療症例が増加している現況にあります。担当外来（歯の診療室）では、すでに審美修復などの領域での先端的診療を行っておりますが、これに加えて歯内療法領域においても院内外のニーズに一層お応えするべく、その専門性を高めることに微力を尽くしたいと考えております。診療のご依頼には引き続き積極的に対応する所存ですので、ご遠慮なくお問い合わせ頂ければ幸いです。

昨年10月の病院統合、本年4月の大学法人化、さらには平成18年の歯科医師卒後研修必修化など、学部・病院とも未曾有の変革の渦中にあることは周知の通りであり、教育・研究・診療活動のあらゆる面で今後ますます意識改革が求められることも、十分認識しているつもりです。高質、効率的かつ収益性の高い診療を学生教育と両立させることなど、両立困難な目標を同時に達成させることが求められる厳しい現況ではありますが、あらゆる面で現状に甘んじることなく実行と反省を繰り返すことにより、本学の発展に引き続き努力いたす所存であります。何卒よろしくご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

